

モスクワ攻防戦の忘却と想起

—戦地、銃後、首都における記憶の政治—

前田 しほ

(島根大学法文学部 准教授)

はじめに

ロシアでは第二次世界大戦の独ソ戦（1941-1945）の記念碑は戦勝の栄光と英雄を称えているように見える。その代表とみなされるのが、ヴォルゴグラード近郊のスターリングラード攻防戦記念公園の中樞ママイの丘の頂点にそびえる古典主義的な勝利の女神の彫像「母国の母は呼んでいる！」【写真1】である。例えば、キース・ロウは、近著『戦争記念碑は物語る』で、この記念碑を、第二次世界大戦の戦勝国の記憶化の第一段階である英雄主義の典型の筆頭に挙げている¹。像本体52m、土台と振り上げた剣の切っ先を含めると87mの高さは、1967年の完成時には世界最高を誇った。

ここで懸念されるのが、多様な文脈や歴史的経緯を省みず、ソ連／ロシアの戦争記念碑を覇権主義、英雄主義のシンボルとして一括して排他することで進行する他者化

である。実のところ、ソ連／ロシアの戦争の記憶が一枚岩ではない。例えば、ママイの丘の記念碑は、当初の構想では、戦地の英雄の顕彰を目的としたパノラマ館とその上部に戦士の像を建立する予定であった。ところが、それらはいつのか国民統合の象徴である勝利の女神にすり替わった。帰還兵による激しい抗議は省みら



写真1 ヴォルゴグラード近郊ママイの丘
(2011年8月10日野町素己撮影)

1 キース・ロウ（田中直訳）『戦争記念碑は物語る：第二次世界大戦の記憶に囚われて』白水社、2022年。他の記念碑に関する記述では、ロウは記念の対象とされる出来事や建立に至る経過を丁寧に説明し、全体として戦争記憶の変化と多様性を示すことに成功している。だからこそ、著名な叙述家による記念碑論において、ロシアの記念碑が主観的で素朴な印象論に終始し、英雄主義が自明視される無邪気さに困惑を感じざるをえない。とはいえ、プーチン体制の下でソ連製の壮大な戦争記念碑が、覇権主義の発動、愛国主義の高揚に利用されている社会的記憶についての西欧知識人による同時代的な証言としては意味がある。

れず、国家と国民が一丸となって戦争を戦いぬいたという神話の形成が優先された²。つまり、戦地の英雄たちは彼らの神聖な記憶の場から排除されたのである³。

遑れば、戦後スターリンは戦争体験を語ることを禁じた。そして、1953年スターリンの死後、抑圧されていた戦争記憶が公共空間に現れたとき、まず初めに出現したのは、戦死者や犠牲になった民間人や、徹底的な破壊によって失われたコミュニティの伝統や文化、失われた生活や人生を悼み、苦難を乗り越えるために共同体が絆を結ぶ場だった。次第に独ソ戦の記憶は国民統合に利用されるようになるが、それでもそれは決して戦争に駆り立てるためのイデオロギーではなかった。ナショナル・アイデンティティ形成の求心力として戦争記憶を利用したブレジネフ時代においても、直接戦争を体験した世代がソ連社会の構成員の大勢を占めており、戦争の厳しさを知り抜いていた。また、依然としてある種の領域はタブー視されており、文学や映画などの文芸作品がそれらに挑戦することで、戦勝神話のなめらかであるべき表面にはしばしば亀裂が入り、^{スティグマ}傷痕が呼び起こされた。

クリミア侵攻以降のプーチン政権は、ブレジネフ期に形成された戦争記憶の神話体系を利用し、偉大な国家としてのナショナル・アイデンティティを取り戻すことに熱心だ。社会主義体制崩壊後の中東欧の多くの国で、いわゆる移行期正義が追及されたこととは対照的である⁴。ロシアは、ナチズム（ロシアではファシズムと呼ぶ）や旧体制との共犯関係を精査したり議論して、過去を清算する代わりに、失った正統性と自尊心を奪回するために、ナチズムに全ての責任を負わせ、独ソ戦の勝利の栄光を再想起することに力を注いでいる。忌まわしい過去を正視しようとする試みはあるが、社会全体としてその道を追及することはない。

本稿はソ連／ロシアの首都モスクワの記念碑空間におけるモスクワ攻防戦（1941-1942）の忘却と想起の現象に注目する。この会戦は第二次世界大戦の中でも最大規模で、独ソ双方から700万人の将兵が参加した。公定記憶としては、モスクワ攻防戦は防衛に成功したこと、モスクワ市内にドイツ軍を侵入や攻撃を許さなかったことが主張される。しかしそれはうしろめたさの裏返しであって、実際にはモスクワ攻防戦は忘却したい不都合な記憶であった。事実、ソ連時代のモスクワ市内にはモスクワ攻防戦の記念碑はほとんどない。ロドリク・ブレスウエートは、ソ連時代のモスクワ攻防戦軽視の理由を、スターリンにとって、それが開戦直後の6か月間の壊滅的敗北、彼自身の誤算、さらになりよりもまず10月の屈辱的なパニックを連想させたからだという。なおかつ、世界各国がジューコフの名と結びつけて覚えている勝利を大げさに持ち上げる理由はないと考えた⁵。スターリン時代についていえば、妥当な指摘である

2 Scott W. Palmer, "How Memory was Made: The Construction of the Memorial to the Heroes of the Battle of Stalingrad", *The Russian Review* 68:3 (2009), p.392.

3 神話とは程遠い現場の錯綜した状況については、アントニー・ビーヴァー（堀たほ子訳）『スターリングラード：運命の包囲戦1942-1943』朝日新聞社（朝日文庫）、2005年が詳しい。

4 橋本伸也『記憶の政治：ヨーロッパの歴史認識紛争』岩波書店、2016年、101-113頁。飯田芳弘『忘却する戦後ヨーロッパ：内戦と独裁の過去を前に』東京大学出版会、2018年、195-199頁。

5 ロドリク・ブレスウエート（川上洸訳）『モスクワ攻防1941：戦時下の都市と住民』白水社、2008年、521頁。

う。

しかしブレスウェートが十分に説明できていない点がある。スターリン存命中に抑圧されたのは戦争記憶全般であり、モスクワ攻防戦だけではない。そしてソ連時代を通じて、そしてその後も戦争の記念化が流動的であることについての認識も弱い。すべてのタブーがスターリンによって規定されていたわけではないし、スターリン死後に一気に解禁されたわけではない。むしろ問題にすべきは、スターリン後もモスクワ攻防戦の記念化が緩慢だったことである。スターリン後の想起も選択的に行われたのであり、それは同時に、別の記憶については引き続き忘却が強要、あるいは選択されたことを意味する。従来の記念碑研究は視覚化された想起の部分に注目しがちで、想起と忘却が対となって機能することを失念しがちであった。ブレジネフ期に形成された独ソ戦の神話はマスター・ナラティブと位置付けられるが、忘却された記憶についてはさしあたりサイレント・ナラティブと呼ぶことにしよう。

つまるところ、モスクワには首都として想像の共同体を演出し、鼓舞するために戦勝を記念する役割があった。その反面、敗戦の記憶と深く結びつくモスクワ攻防戦のローカルな戦争体験は、首都という政治的な立場にとっては都合の悪い過去であるため、まるで存在しないかのように黙殺された。モスクワは占領こそされなかったが、市民のうち壮健な男子は前線へ、女性も郊外に塹壕掘に動員された。戦死者が異様に多いのは、軍需産業等の疎開や反撃準備の時間稼ぎをするために、装備も訓練も不足した状態の素人を前線に投じる人海戦術をとったからである。また、民間人も度重なる空襲から逃れるために地下鉄駅に避難し、銃後に疎開した。レニングラードのような包囲戦や、前線が通過した地域ほど、凄惨な体験はせずに済んだものの、包囲の不安、陥落の危機は切実だった。

こうした戦争体験についてモスクワ市内では沈黙が保たれてきた。1995年になって記念碑が出現したが、マスター・ナラティブの中央を占めることは決してなかった。それに対して、郊外の戦場跡や、パンフィーロフ師団が結成されたカザフスタンのアルマタでは、ブレジネフ期に立派な記念碑が建立されている。モスクワ攻防戦は全面的に忘却を強いられてきたわけではないのだ。時代や場所によって想起の濃淡が異なる。また注意すべきは、戦争の（非）記念化の動機はスターリンや中央政府にのみ求められないことだ。民衆もまた自ら想起／忘却を望む。民衆が同意して初めて記憶は集合的記憶となるのである。

ソ連／ロシアにおける独ソ戦のナラティブは、想起と忘却の間で、政府と民衆の間で、複雑な力学が働き、ねじれているが、モスクワは首都であるからこそそのふり幅が大きい。独ソ戦の記憶の政治性を理解する鍵の一つは、モスクワ攻防戦の（非）表象にあるといえよう。したがって、戦場や銃後ではマスター・ナラティブとなりえたが、首都ではサイレント・ナラティブのままであり、表象が可能になった時代においても、主流にはなりえないメカニズムを解明することが課題となる。注視すべきは、ブレジネフ期のモスクワではナショナルな記念碑は、戦死者追悼の機能を担う無名戦士の墓しかなかったことだ。平均的なソ連都市には、戦勝を記念する空間と、戦死者

を追悼する空間は必ず対となって現れる。通常は、中心部の広場や郊外の小高い丘がそうした想起の空間として選ばれ、隣接するにせよ、距離をとるにせよ、戦死者を悼む母の像や無名戦士の墓による追悼空間と、壮大なオペリスクや勇敢な兵士の彫像によって戦勝／解放を顕彰する空間が併設される。これは、地縁血縁で結ばれたローカルな共同体の欠員を悼むと同時に、戦勝の歓喜を再確認し、勝者／解放者としての自尊心を満たす場である。モスクワの場合は国民的な物語として、死者を追悼することで、国民統合を図る空間に偏っていた。これは中央政府の思惑か、それとも首都住人の自らの意志が関わっているのが線引きが難しいところである。そこで、まずモスクワ攻防戦の闘いの場とされる地域の記念碑について状況を報告しながら、整理と分析を試みる。次にモスクワ攻防戦に将兵を送り出した側、つまり遺族たちが暮らす戦後における記念碑空間をとりあげる。そのうえで、モスクワに注意をほらう。モスクワ全体の記念碑空間の構成を考察し、モスクワ防衛戦に関わる記念碑や博物館の所在を明らかにする。

1 埋葬地の記念碑

独ソ戦で戦闘が発生した地域は広範囲に及び、戦場の跡地には必ずしも記念碑が建立されているわけではない。特に、ソフィン戦争や独ソ戦の最初の半年は、死者は埋葬される暇もなく放置され、骸が転がっていたという。哀れに思った地元民が遺体を埋葬しても、必ずしも記念碑が建てられたわけではない。そのまま忘れ去られた死者は無数であり、それらの発掘作業もはかばかしくない。死者たちは決して厚遇されていない。

壮大な祝祭的記念碑空間として聖別される戦跡はごく少数であり、独ソ戦の戦局にとって重要かつソ連側の勝利に終わった闘いに限られる。スターリングラード攻防戦の勝利のシンボルとしてのママイの丘【写真1】、「バグラチオン作戦」を開始したミンスク郊外の榮譽の丘【写真2】が例にあげられる。壮大な記念碑や武器・兵器の展示場や遊園地がしばしば隣接して設けられるため、旧ソ連では、これらの施設を表現する普通名詞としてメモリアル・コンプレクス、すなわち記憶の複合施設なる表現が定着している。個別には戦勝記念公園かそれに近い呼称をもつが、その多くはさながら戦勝を記念するテーマパークといったところで、平日は学校生徒、休日は家族連れでにぎわうことが多い。

圧倒的多数の戦跡は、もっとつつましい。戦争記念碑の建立年代はその碑の社会的政治的位置づけを知る重要な手がかりである。初期のつつましい記念碑は建立年を明記していないこ



写真2 ベラルーシ共和国、ミンスク郊外「榮譽の丘」(2013年9月9日筆者撮影)

とが多く確認が難しい。そのなかに、ひと際興味深い記念碑がスモレンスク州ヤールツェヴォ近郊の街道沿いの共同墓地にある。兵士のブロンズ像(1953年建立)【写真3】である。ドイツ軍がモスクワを目指した道筋であるこの近辺ではソ連軍は膨大な戦死者を出した。ソ連側に正確な記録はないが、アンドリユー・ナゴルスキによると、ドイツ側の記録として、1941年10月初旬の二週間足らずで40万人殺害、60万人捕虜、計100万人が犠牲になったという数字がある。当時も現在も中央政府はこれらの遺骸に関心を払わず、少数の有志によって結成された探索団が細々とした発掘が行っている。⁶そして、この地域でソ連軍の反撃が始まったのが1943年の8月で、スモレンスクは10月2日に解放される。



写真3 スモレンスク州ヤールツェヴォ、ヤコブレフ軍事記念墓地、名称不詳
(2015年9月26日筆者撮影)

当該の記念碑があるのは、スモレンスクとヴァジマの中間ヤールツェヴォの町はずれに位置するヤコブレフ軍事記念墓地である。これはローカルな局地戦の戦死者の埋葬地である。記念行事を行うのに十分な広場状の空間が自動車道路の脇に、突然現れる。芝生がきれいに刈られ、花が捧げられていたが、調査前日の9月25日はスモレンスク解放記念日だったので、その数日以内に記念式典が行われたことが推測される。空間の中心は、台座に乗った兵士像である。勇敢な英雄のイメージではない。その手の銃口は下向きで、首をわずかに垂れ、死者を悼む意思が表現されている。銅像の正面に永遠の火が灯る。背景の煉瓦造りの壁は、広場全体を弧で囲み、その表面には死者の名前が刻まれている。赤い煉瓦の壁はモスクワのクレムリンの城壁を想起させるモチーフで、頻繁に見られる。祖国ロシアの中心であるモスクワを防衛するという国民としての義務を喚起するものであると同時に、首都の戦争記念碑空間との連続性が示されている。

煉瓦の壁の裏に打ち付けられたプレートによると、スモレンスク州が解放された1943年9月に共同墓地が作られ、1953年に兵士像が建立され、スモレンスク解放39周年を記念して墓地が整備され、1982年9月25日に永遠の火が灯った。他方で、壁の表側には、葬られたのは1941-1943年の間に戦死したソ連軍兵士3720人であることが記されている。他方で戦況を説明する看板が壁の両脇の二か所にあり、向かって左手に1941年の闘い、右手に1943年の闘いが描かれている。つまり埋葬された遺体は、1943年のソ連側の反撃の戦闘のために亡くなった者たちであると断じているが、記念碑空間としては敗退期の死者も追悼の対象とみなしている。注意すべきは、1941-1943という語句自体が決り文句であることだ。占領された時期から解放された時期を示して

6 アンドリユー・ナゴルスキ(津守滋監訳、津守京子訳)『モスクワ攻防戦：20世紀を決した史上最大の戦闘』作品社、2010年、167頁。



写真4 オリョール州ボルホフ郊外、
名称不詳（2010年5月29日筆者撮影）



写真5 モスクワ市ペロフスコエ墓地、
名称不詳（2012年4月4日筆者撮影）

いるのであって、1941年の死者が1943年に改葬されたとは考えにくい。1982年に単なる墓地から死者を追悼するための記念空間へと転換したことを証明するのは永遠の火の設置である。また兵士像が銅像であることも珍しい。

このような戦死者に対する追悼を表現する兵士の像はあちこちで見られる【写真4】。しかし材質は粗悪で、石膏に金色ないし銀色のペンキを塗ったものが多い。スタイルもどれも似通っていて、芸術性に欠け、陳腐で、しばしば作家名、建立年の記載がない。それでも戦傷死者を葬ったモスクワ市内の共同墓地に1950年代後半から1960年代にかけてこのタイプの兵士像が建立されていることが確認されている【写真5】。建立年が明らかな場合、第一次スターリン批判が行われた1956年が目立つ。

1957年コムソモーリスカヤ・プラヴダによって、ヴォロコラムスク街道沿いのレーニノ村で、この種の兵士像が共同墓地に建立されたことが報じられている【写真6】⁷。優秀なピオネールを招いて、落成式が行われた点から、地域共同体にとっては晴れがましいパブリックな式典であったことが読み取れる。このように、スターリンの死後数年の間に、追悼の意を示す兵士の像が埋葬地や共同墓地に建てられた。

ヤールツェヴォの場合、1982年の再整備に伴い、石膏像が銅像へと建て替えられた可能性がある。ただしここで重要なのは、材質ではなく、戦死者を悼む碑が最初に建立されたのが1953年という事実だ。

スターリン存命中、戦争記憶全般が公共空間で語られることが許されなかった。戦争の記念碑も建立できなかった。戦勝の功績は全てスターリンが占有していたからだ。最高指導者が亡くなったまさに同じ年にヤールツェヴォで戦死者追悼碑が建てられたことは偶然とは考えにくい。現段階ではこれがスターリン死去の前でなく、後であると断定できる根拠はないが、死去後と考えるほうが整合性が高い。

スターリン死去後に、戦争の記念碑がソ連全土で建立されていく現象は、中央政府の主導によって生じたものではない。スターリン存命中に沈黙を強いられた記憶が噴

7 Волоколамское шоссе, 42-й километр.// Комсомольская правда. 10.05.1957.

出したと理解すべきである。戦場の死者は、土地の共同体にとっては、ソ連の同胞ではあるが、見知らぬ他人である。とはいえ、戦争はどこか遠くで起きたのではない。土地の共同体も戦闘に巻き込まれ、その構成員も亡くなっている。埋葬の余裕がなければ骸はそのまま放置されたので、地元民は無数の遺骸を目にしている。埋葬の余裕があっても、故郷に送られることなく、亡くなった土地にまとめて埋葬された。戦場の埋葬地に見られる記念碑は、土地の共同体がこうした死者を忘れることなく、哀れみ、悼んできたことを示している。

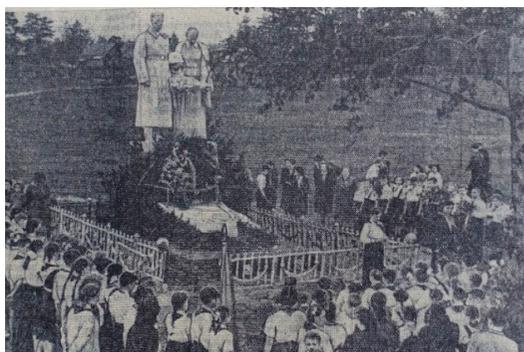


写真6 レーノ村、兵士像落成式
(Комсомольская правда. 10.05.1957.)

このような記念碑は墓標の延長線上にある。建立主体を識別できるものはごくわずかだが、少なくとも中央政府ではないことが断言できる。つまり、国民的記念碑とは一線を画すべき存在である。実際ソ連の国民的戦争記念碑を一手に集めたB.A.ゴリコヴァ編『人民の功績』⁸にこの種の記念碑は掲載されていない。墓地の兵士像はパブリックな記憶とは認められていないことがうかがえる。これらはあくまでスターリニズムの抑圧に対抗するヴァナキュラーな記憶領域にとどまる。

埋葬地には、現実には死んだ兵士たちの身体が眠る。銃後に移送された戦傷死者は別として、多くは前線が通過した戦場や病院から遠くない距離にある。推測される訪問者は、死者を悼む戦友、戦場となった地域コミュニティの住人、遺族である。このことを踏まえると、悼みを捧げる兵士像とは生き残った戦友を象っており、訪問者の代替表象と位置づけられる。訪問者とともに追悼の意を表明するだけではない。訪問者がいなくても、生存者たちが日々の雑事に追われていても、代わりに追悼が捧げられる。サバイバーたちが、死者を常に思い続けている、記憶しているという堅い意志が可視化されるのだ。結果的に、死者の身体が訪問者たちを結び付け、きょうだい愛的な共感の場が生じていることが注目される。国父レーニンやスターリンの像とは全く異なる力学が記念碑空間に現れたのである。しかし、ヴァナキュラーな水平的連帯はその後独ソ戦についての集合記憶を主導することはなかった。スターリン神話に代わる強力な求心力を求めて、中央政府が独ソ戦の記憶に目をつけたからである。次章では、ブレジネフ期に勇敢な兵士像が国民的記念碑として登場し、公共空間を再編していく様子に注目する。

8 Голикова. В.А. Подвиг народа: памятники великой отечественной войны 1941-1945. М: Политической литературы. 1984. 他方でЧистяков. А.В. Акчурни Р.С. Антошкин. Н.Т. Долгих. В.И. Слухай. И.А. Под ред. Памятники Боевой славы Москвы: Альбом-справочник. М: Армпресс. 2007. には、この手の兵士像が複数含まれている。プーチン体制下では、ヴァナキュラーな記憶を国民統合に動員する現象が見られる。

2 モスクワ攻防戦の局地戦の記念碑

2.1 戦勝20周年

戦勝20周年の1965年から1970年代にかけて、ソ連全土で戦争を記念する記念碑が大小問わず無数に建築された。モスクワ攻防戦の局地戦の地にも10mクラスの記念碑が建立されている。モスクワ近郊ではヤフロマのペレミロヴォ高台（後述）やネリドヴォ村（後述）に建立されている。このクラスになると地元住民の追悼の情だけで建設できない。上位の行政主体の関与が不可欠である。そこで考えるべきは、1965年というタイミングで何があったのか、ということだ。単なる戦勝20周年の節目がソ連全土に戦争記念碑ブームを起こすとは考えにくい。上位の行政主体が敗北の戦死者の可視化に関与するのは、何らかの劇的な大転換があったことを示している。

そこで注目されるのが、戦勝20周年の記念事業におけるブレスト要塞とモスクワの名誉回復である。1945年に英雄都市と呼ばれた5都市（レニングラード、スターリングラード、オデッサ、セヴァストープリ）に対し、1965年に英雄都市の称号授与が行われた際に、ブレスト要塞とモスクワも追加された。注目されるのはブレスト要塞で、1941年6月22日ドイツがソ連領に侵攻したその日に攻撃され、またたくまに占領される。これはスターリン体制下では恥ずべき敗北とみなされ、戦死者も投降者も裏切り者とされた。

しかし、「雪解け」期に汚名返上し、ブレジネフ期に壮大なモニュメントが建築された。第一次スターリン批判の翌年に一人の作家が名誉回復させたからである。セルゲイ・スミルノフ（1915-1976）のオーチェルク『ブレスト要塞』（1957）⁹である。スミルノフは1964年にレーニン賞を授与され、1965年に上述のようにブレスト要塞に英雄要塞の称号が授与された。同年戦勝記念公園建設が決定し、1971年に完成する。恥ずべき敗北とされてきた闘いが、死を賭した祖国防衛の精神と再解釈されたのである。

ブレスト要塞の名誉回復は敗北の死者でも言語化／視覚化しようというメッセージ性を放つ。そればかりか、一定の文脈を保てば、つまり、戦場や埋葬地など悲劇の現場であれば、顕彰の対象になりうる、さらにナショナルな国民統合のシンボルともなりうることが示されている。自己犠牲の美德を国民に内面化させることができれば、中央政府にとっては悪くないナショナルな物語の筋書きである。

重要なのは同じタイミングでモスクワが英雄都市の一員に加えられたことだ。緒戦期の敗退の闘いが汚名を返上したことで、その延長線上にあるモスクワ攻防戦に再考の余地が生まれたのである。ただしこの時点で記念碑の建立という形の記念化は、モスクワ郊外の戦場や防衛線に関連する土地に限られる。

それでは具体的にモスクワ攻防戦の記念碑を見ていこう。ターニングポイントとして重要なのは、独ソ戦戦勝記念20周年1965年、モスクワ防衛戦勝記念25周年1966年な

9 *Лейдерман Н. и Липовецкий М.* Современная русская литература 1950-1990-е годы. Т.1. 2006. Москва: Академия., С. 97.

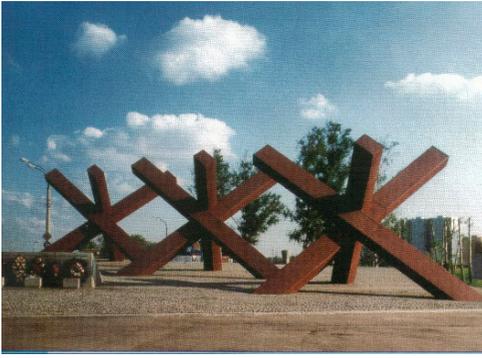


写真7 モスクワ州、対戦車障害物ハリネズミの記念碑 (Памятники Боевой..., 58)



写真8 モスクワ州、第16軍および義勇軍の戦士の記念碑 (Памятники Боевой..., 56)

いし1967年、独ソ戦勝利30周年の1975年である¹⁰。

独ソ戦の戦勝が大々的に祝われるようになったのは、20周年の節目である1965年である。ママイの丘の「母国の母」は、スターリン死後直後から建築計画がスタートし、あまりの巨大さに完成がずれこんだものの、その存在は知られていたはずである。また戦死者を悼む碑も各地で続々と建立されており、1966年にも戦場や防衛戦にも記念碑建立の準備が進められた。理由は突き止められなかったが、レニングラード街道沿いが集中している。外国人にとっても馴染みがある記念碑がある。シェレメチェボ空港とモスクワ市の中にある、いわゆるチェコのハリネズミを象った記念碑【写真7】(建築家：A.アガフォノフ、И.エルミシン、A.ミヘ、エンジニア：K.ミハイロフ)が建てられた。このヒムキ地区は、モスクワ市とモスクワ州の境界のモスクワ州側にあたる。

さらに同街道41km地点にT-34戦車の記念碑「第16軍および義勇軍の戦士の記念碑」【写真8】(建築家：И.ボクロフスキー)が建立されている。

レニングラード街道の戦車記念碑が建立されたあたりは、ゼレノグラードへの入り口で、このあたりから、クリュコヴォ、イスクラにかけて、ドイツ軍がモスクワに最接近した。1967年にクレムリンに運ばれ、無名戦士の墓に埋葬された遺骸は、クリュコヴォで戦死し、戦車記念碑からほど近い共同墓地に埋葬されていたもので、その場には1974年に壮大な「モスクワ防衛者記念碑」(後述)が建立されている¹¹。

この時期には、メディアとしての記念碑に期待される機能に変化し、それはヒトを象った記念碑の身振りからも読み取ることが出来る。ここで挙げたいのは、ヤフロマ市のペレミロヴォ高台の「モスクワ近郊の闘いの英雄にささげるモニュメント」(彫刻家：A.ポストル、B.グレボフ、H.リュビーモフ、B.フョードロフ、建築家：Ю.クリ

10 欧州では1945年5月8日が対独戦終戦の日とされるが、時差のタイミングで、ロシアでは5月9日である。なお、独ソ戦の戦勝が大々的に祝われるようになったのは、20周年の節目である1965年である。またナチ・ドイツ軍の侵攻を受けた地域ではそれぞれ局地的な「解放」についても記念日が制定されている。1941年8月から1942年1月にかけてのモスクワ攻防戦は、途中で年を超えたため、場所によって節目のタイミングが異なる。

11 Абрамов.А.С. У кремлевской стены. М. Политиздат. 1987. С. 350. Голикова. В.А. Подвиг народа. С.23.

ブシチェンコ、A.カミンスキー、И.スチェパノフ、エンジニア：C.ハジバロノフ）【写真9】である。1941年11月27日から12月5日にかけての局地戦の25周年を記念したもので、やはり1966年に建立された。レリーフ付きの土台が15m、自動小銃を掲げ、いままさに突撃しようとする兵士の銅像13mで、計28mの壮大なモニュメントである。

こうした死に向かわんとする一瞬を切り取った英雄の像は、首を垂れ、戦死者を追悼する兵士の像【写真3～6】とは明らかに異なる。ペレミロヴォ高台に現れた兵士像は死者である。生者ではない。訪問者の視覚に刻まれるのは、命を落とす直前の死者の英雄的行為である。造形的な面に注目すると、突撃の姿勢は前方への運動性を意味する。ソ連のプロパガンダ・アートにおいて、前方



写真9 ヤフロマ市、モスクワ近郊の闘いの英雄にささげるモニュメント（2010年9月14日筆者撮影）

とは空間的な意味での前方というだけでなく、時間的な前方、それも肯定的な意味を伴う将来性を示す。すなわち、明るい未来であり、独ソ戦の文脈であれば、輝かしい戦勝である。この丘は、モスクワ近郊での反撃の起点とされ、ゆえに記念碑建立の地として選択されたのだろう。ブロンズの兵士が見据えているのははじめな逃走や裏切りや恐怖といった苦々しい記憶ではなく、ささやかながらも確かな反撃であり、その先のベルリンであり、輝かしい勝利である。この兵士像によって、戦死者は哀れな犠牲者ではなく、生命を賭して祖国を守る将兵が称賛すべき英雄として再定義されている。

ペレミロヴォ高台の上部はかなり広がりがあり、記念式典が出来るように整地されている。これは局地的な地域共同体の善意による記念碑ではないし、追悼だけが記念碑の機能ではない。たしかに、ママイの丘が、勝利の女神ニケに起源をもつ「母国の母」が建立されることによって、国民統合の空間に召し上げられたことと比較すると、帰還兵士たちの記憶は尊重されている。しかしながら、記念碑を見上げる訪問者として期待されているのは、もはや戦友や遺族、現地コミュニティといった戦死者と直接的なかわりを持つ者ではなく、「国民」である。スターリニズムに対抗する記憶、あるいはヴァナキュラーな記憶としてではなく、ナショナルな統合を目指す公的な記憶としての性格が付け加わる。トラウマ的な記憶を抑え込んだ、戦勝の物語というマスター・ナラティブなのである。ここには、世代格差も絡んでくる。戦争が終わって20年以上経過すると、戦争を記憶していない世代、経験していない世代が現れ、記憶の継承が社会的課題となっていた。そこで考えるべきが、新たに登場した記念碑が何を媒介しているのかという問題である。記念碑空間で行われる式典は、集合的記憶をパフォーマンスに構築する重要な要素である。そこに後続の世代も参加することによって、自身が体験していない記憶に集合的記憶として接続されていく。

スターリン後の追悼する兵士像は、きょうだい愛的な共感の場を創出した。これに対し、ブレジネフ期の勇敢な兵士像において、死者を追悼する要素がゼロになったわけではないものの、明らかに異なる要素が注入されている。悲劇的な英雄イメージは、強さ、勇敢さへの賛美や憧れを喚起し、祖国を愛し、いざとなれば防衛に命を捧げることを教え込む。この時期に設置された戦車や対戦車障害物といった即物的な記念碑もまた、死者への追悼から、戦闘に伴う強さや勇敢さといった感情に注意を向ける機能をもつ。

そしてこのような感情の動員は、何もソ連特有の現象ではない。近代国家が男性を兵役に動員するために用いた「感情の教育」である¹²。勇敢な兵士像が行っているのは、愛国主義な模範的理想的な国民を再生産するための教育である。英雄的な死を悼むと同時に、愛国主義と限りなく同一化させた郷土愛で胸を熱くさせる仕組みが見受けられる。それと同時に、名誉という感情の再配分が見られるようだ。「西側」の事象を中心に感情論を記したウーテ・フレーフェルトは、名誉を失われつつある過去の感情とみなしたが、「東側」で同様とは限らない。フレーフェルトによると、西欧では、二度の大戦によって壊滅的な破壊と未曾有の大量殺人の経験によって、命がけで勇気のアカシを立てるような男性的ヒロイズムを大切にしなくなった。その背後にあるのは、国家に対する義務、社会に対する責任を余計に背負うよりも、人生を大切に楽しもうという姿勢の変化がある¹³。これに対し、「東側」では命がけの英雄行為を内面化する文化が培われた。その教育の成功の可否には検討の余地があるが、少なくとも、ソ連崩壊後、独ソ戦の記念碑や社会主義時代の記念碑が撤去される事態に際して、少なからずのロシア人や帰還兵が侮辱を感じ、穏やかならぬ行為に出た者もいる¹⁴。

ともかく、モスクワ市の周辺の記念碑の建立年に着目すると、65年から67年の短期間の間にモスクワ攻防戦が記念碑という形で視覚化されている。この時期がモスクワ攻防戦を記念する最初のタイミングであるが、実行に移されたのがモスクワ市内ではなく、郊外のモスクワ州の戦場や埋葬地であることポイントである。公的空間への参加は周縁から始まったのである。つまりは、まだローカルな局地戦の記念碑であり、ナショナルな象徴とはなりえていない。

2.2 パンフィーロフ師団の記念碑

次に注目されるのが、1975年の戦勝30周年記念事業である。このとき目玉となった

12 ウーテ・フレーフェルト（櫻井文子訳）『歴史の中の感情：失われた名誉／創られた共感』東京外国語大学出版会、2018年、127頁。

13 フレーフェルト『歴史の中の感情』、85頁。

14 橋本伸也『記憶の政治』、1-20頁がエストニアの兵士の銅像をめぐるロシア語系住人の反発や運動に詳しい。またスヴェトラナ・アレクシエーヴィチも、自分が誇りとする社会主義時代の記念碑が撤去されることに不快感を示し、戦時中闘ったプレスト要塞を訪れることを慰めとし、最期はプレストの駅で投身自殺を果たした老いた帰還兵に注目している。スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（松本妙子訳）『セカンドハンドの時代：「赤い国」を生きた人びと』岩波書店、2016年、231-262。アレクシエーヴィチほか『アレクシエーヴィチとの対話：「小さき人々」の声を求めて』岩波書店、2021年、88-102頁。

のは、いわゆるパンフィーロフ師団の顕彰である。これは戦時中もプロパガンダに利用された第316師団第1075連隊の第4中隊28人の兵士についての神話で、戦後は戦場跡のネリドヴォ村、ヴォロコラムスクからモスクワ市北部まで幅広い地域に記念碑が見られる。さらに、彼らの出身地カザフスタンやキルギスタンにも記念碑が建築されている。

パンフィーロフ師団を有名にした戦闘は、スモレンスク州の惨劇の一ヵ月後、11月16日に起きた。このころには、敗走のパニックは収まり、赤軍は組織的に抗戦ようになっていた。イワン・パンフィーロフ少将（1893-1941）が率いる第316師団がモスクワに向かおうとするドイツ軍の攻撃を受ける。政治委員B.Γ.クロチコフ率いる第1075連隊が、ドゥボセコヴォ鉄道待避駅でドイツの戦車隊に応戦した。その二週間後、戦果を誇大に掻き立てた記事が「赤い星」紙に掲載された。50台の戦車を破壊し、たじろいだ兵士一名を除き、28人全員が戦死したという伝説は、戦時プロパガンダとして大いに利用された。そのため、その後明らかになった都合の悪い事実はもみ消された。例えば、28人全員がその場で戦死したわけではない。何人かは生き延びてドイツ軍の捕虜になり、ある者は脱出してウクライナの出身村に帰って、ドイツ占領下で村長をして、「解放」後対敵協力者として逮捕された。¹⁵

ペレストロイカ以降独ソ戦の様々な伝説が再検証され、実態が明るみにでたが、この件も同様である。しかしそうした再検証には強い反発があり、社会的に受け入れられたとはいえない。今日でも神話が幅を利かせている。パンフィーロフ師団に関するミュージアム、ウェブサイトなどでも、不都合な事実は言及されず、勇敢な兵士たちの物語としてもっぱら語り継がれている。こうした現象からも、神話を政府が作り上げ、強要したと断罪することはできない。庶民が「真実」を拒絶するのは、口あたりのよい神話に同意するメリットがあるからだ。戦勝の伝説に酔うことで、自尊心を満たす一方で、思いだしたくないトラウマ的体験を封印できる。被害者としてのトラウマだけでなく、沈黙が保たれてきた加害者トラウマも重大な要因のはずである。これら集合的記憶は一枚岩ではない、というのが筆者の主張であるが、しかしある種の共犯関係はある。

戦時中からパンフィーロフの扱いは特別だった。ソ連邦英雄の称号を授与された人物はしばしば胸像として戦勝記念公園などに並び、英雄の小道と呼ばれる。またソ連各地の通りや学校の名称に名を冠される。ところが、パンフィーロフが預かった名誉はこれをはるかに超える。1942年5月5日アルマアタの主要な公園のひとつが「パンフィーロフ師団28人記念公園」（以下パンフィーロフ公園と略す）と改称された。パンフィーロフは開戦時キルギス・ソヴィエト社会主義共和国の軍事コミッサールであったからだ。第316師団はカザフスタン、キルギスから召集され、ロシア民族を含めた13の民族から構成された。同年、キルギスの首都フルンゼ（現ビシケク）にはパンフィーロフの銅像（彫刻家：O.マヌイロヴァ、A.マヌイロフ、建築家：B.ベリユシュスキー）【写真9】が建立され、建立された公園は彼の名に改称された（今日もパ

15 ナゴルスキ『モスクワ攻防戦』449頁。

ンフィーロフ公園の名は残っている)。革命記念日に合わせた1942年11月7日という除幕式の日取りも、戦意高揚の目的を示している。ソ連邦英雄の銅像としては、これがソ連で最初の銅像建立であると同時に、戦中では唯一の事例だという¹⁶。パンフィーロフの顕彰は銃後の総力戦体制を喚起するためであり、モスクワの地下鉄駅同様、戦時プロパガンダ空間の名残である。

その反面、戦跡で特別な顕彰は見られない。戦闘が行われたドゥボセコヴォ駅とネリドヴォ村内に質素な共同墓地が存在する【写真10、11】。スタイルから推測すると、村内の共同墓地はブレジネフ期に改築されている。ドゥボセコヴォ駅付近の共同墓地は素朴な墓碑のみだ。

なおパンフィーロフ本人は埋葬地も別格で、伝説の闘いの二日後に近隣のグセネヴォ村で戦死したのだが、埋葬されたのは、亡くなった村の共同墓地ではなく、モスクワのノボデヴィチ墓地である。この墓地はエリートのみが埋葬が許される特権的な墓地で、1964年に三名の英雄が選ばれ、立派なメモリアルが作成された際には、パンフィーロフもその一人として顕彰されている【写真12】。



写真9 ビシケク、パンフィーロフ像
(2018年9月15日筆者撮影)



写真10 ネリドヴォ村ドゥボセコヴォ駅付近共同墓地
(2015年10月2日筆者撮影)

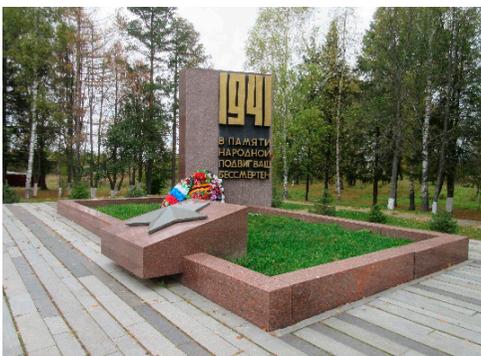


写真11 ネリドヴォ村、共同墓地
(2015年10月2日筆者撮影)



写真12 モスクワ市、ノボデヴィチ墓地
(Памятники Боевой..., 56)

16 Петров. В. Пишпек исчезающий: Пишпек-Фрунзе-Бишкек. Бишкек. 2016. С. 129. 戦時中は金属は優先的に軍需物資に回されたからである。実際、他にこうした事例は確認できなかった。建立されても、材質がはるかに劣る石膏であり、銅像への建て替えはスターリン死後になる。



写真13 ネリドヴォ村、ドウボセコヴォ駅付近28人の功績記念碑
(2015年10月2日筆者撮影)

このように、戦跡での記念化の動きは、モスクワ攻防戦25周年記念の1966年前後に集中している。上述のノボデヴィチ墓地のメモリアルにつづき、1967年に戦死者2人が埋葬されたネリドモ村に博物館が建てられた。これはヴォロコラムスクの郷土史博物館「ヴォロコラムスク・クレムリン」の管轄の下、今日も運営されている。そして最も派手な記念事業が行われたのが、戦勝30周年の1975年である。ネリドヴォ村戦場跡とアルマアタのパンフィーロフ公園の双方に、壮大な記念碑が作られた。1975年5月7日付のコムソモーリスカヤ・プラウダ第一面で、その前日6日にドウボセコヴォ駅近くの戦場跡で行われたパンフィーロフ師団の英雄たちを記念するメモリアル・コンプレックスの落成式が報じられている。

ヴォロコラムスク街道102km地点、「28人の功績記念碑」【写真13】と名付けられた記念碑は、およそ10mの高さの6人の兵士像から成り、いずれも表面は御影石のプレートでおおわれている。彫刻家H.C.リュビーモフ、A.Г.ポストル、B.A.フョードロフ、建築家B.E.ダチュク、Ю.Г.クリブシチェンコ、И.И.ステパノフ、以上の共同作業で建立された。また式典が可能な広場や展示施設、武器兵器展示スペースなどの構造物が近辺に見られる。

彫像の容貌も注目に値する。スラヴ系の容貌と混じって、アジア系の目鼻立ちが見いだされる。筆者は気づかなかったが、現地に同行した民族ロシア人の知人は、目元や頬のあたりの特徴から、ベラルーシ、ウクライナといった民族性を読みとることができる。つまり、6体の彫像はそれぞれ、ベラルーシ、ウクライナ、カザフ／キルギスの特徴をもつ兵士像で構成されているのである。実際に動員された兵士は、アジア系だけでなく、ウクライナやロシアからのスラヴ系移住者も多かったようであるが、実際のパンフィーロフ師団における民族集団の割合と結びつけて考え



写真14 モスクワ、パンフィーロフ師団
英雄の栄光 (Памятники Боевой…, 59)



写真15 モスクワ州、モスクワ防衛者記念碑
(Памятники Боевой…, 55)

るべきでないだろう。注目すべきは民族的多様性である。ロシアの戦争記念碑における群像は、一般的に、ジェンダー、世代、民族などの多様な属性をもつ国民が一致団結して勝利をつかんだというメッセージを放つ。これは生者と死者の間の水平的連帯性ではなく、死んだ英雄たちとの間の連帯であり、団結である。ソ連の首都たるモスクワ防衛を果たしたのは諸民族の団結だと強調しているのである。

またこの時期には、モスクワ市とモスクワ州の境界付近、モスクワ市側のパンフィーロフ師団英雄通りにも1975年に赤い煉瓦の壁を背にした「パンフィーロフ師団の栄誉を称えるメモリアル」【写真14】が建立された。片手に自動小銃、もう片方を高く上げる突撃スタイルだ。クレムリンを想起させる赤い煉瓦の壁を背景にした銅像で、造形美に欠け、彫刻家は不明である。

またこれに先立って、1974年にモスクワからレニングラード街道40kmの地点、ゼレノグラード行政区への入り口付近に高さ27mの墳丘墓と高さ42mの構造物それに兵士の顔の土台を組み合わせた「モスクワ防衛者記念碑」【写真15】(全高58m、彫刻家E. シュテイマン-デレヴァンコ、A. シュテイマン；建築家：N. ポクロフスキー、Ю. スヴェルドロフスキー)から構成されるメモリアル・コンプレクス(通称シュトイキ)が建築された。ここは1941年の防衛戦で、先述の戦車の記念碑【写真8】から1キロあまりモスクワ側に寄っている。

このように、1966年と1975年を中心にモスクワ州からモスクワ市の境界付近、すなわち戦闘が行われた地域や防衛戦で戦死者追悼記念碑が建立された。しかし、依然としてモスクワ市内では、モスクワ攻防戦を直接謳った記念碑は現れていない。筆者が見落としている可能性はあるが、大きな傾向としてブレジネフ期にもモスクワ市内にモスクワ攻防戦を直接記念した公共記念碑は現れなかったといえる。

3 銃後の記念碑：アルマアタのパンフィーロフ師団の記念化

他方、カザフスタンの当時の首都アルマアタ(現アルマトイ)のパンフィーロフ公



写真16 アルマトイ、パンフィーロフ公園、「功績」(2014年6月6日筆者撮影)



写真17 パンフィーロフ公園、「永遠の火」(2014年6月6日筆者撮影)



写真18 パンフィーロフ公園レリーフ(2014年6月6日筆者撮影)



写真19 パンフィーロフ公園レリーフ(2014年6月6日筆者撮影)

園では、1975年5月8日に「榮譽のメモリアル」が開かれた。パンフィーロフ師団28人を顕彰する突撃する兵士の群像「功績」【写真16】、その右側に亡くなった戦友を載せた馬の手綱をひく赤軍兵士を描いた「誓い」のハイレリーフ【写真17】、左側に「榮譽を（ラッパで）鳴らす」のハイレリーフ【写真18】、そして中央に永遠の火【写真19】が燃える。建築家T.K.バセノフ、P.A.セイダリン、B.H. キム、彫刻家B.B.アンドリュシチェンコ、A.E.アルチモヴィチらによって造られた。正面の兵士像【写真16】は前のめりの突撃の姿勢で、物理的にも前方にせり出しているので、迫力の点では他を寄せ付けない。この公園は散策する市民に人気のある土地だが、公園に初めて遊びに連れてこられた幼児は兵士像に怯え、泣き出すという。ソ連時代は、優秀な学童やピオネールが儀仗兵として立った。1993年にアルマトイ国立歴史的建築物・メモリアル公園に指定され、2010年代には儀仗兵が復活し、優秀な高学年生徒が務めている。

このようにパンフィーロフ公園の「榮譽のメモリアル」はカザフスタンの戦争記憶の中心的空間であるのだが、違和感もある。兵士像の土台に刻まれたたてている文言が「ロシアは偉大なり、一歩も退くな、背後はモスクワだ」だからだ（後述）。勇敢な兵士というモチーフ自体はブレジネフ期特有であるが、真ん中の、最も大きな像はロシ

ア的容貌に見える。両側の群像には、細い目や高い頬骨のようにアジア的要素がはっきり見て取れる。造形面でロシア／カザフの序列が認められる。民族性を超えて団結した、それが勝利に結びついたというメッセージ性は明らかであるが、しかしあくまで主導するのはロシアなのである。

この町の十月革命戦士記念碑【写真20】（彫刻家：H.C.ジュラブリョフ、建築家：И.И.トカリ、B.K.ヴォロニン）¹⁷においても、ロシアの優位性を見出すことができる。4体の男性像から成り立つが、どの方向から見ても3体の顔が見えるように構成されている。経年劣化が著しいものの、中央のもっとも高い位置でさっそうと足を踏み出す男性像は、共産党員で、指導者然とし、ロシア的風貌であることがみてとれる。向かって右側はプロレタリアートで、共産党員を支えるように傍にたつ。左側の二体が民族性を示している。一人は正面向きの膝立ちでカザフ人、後方の人物はセミレチエ・コサックである。後ろ向きなのは、過去、すなわち帝政の時代を振り返っているからだ。ロシア人に導かれる人民という構図が明瞭に示され、ソ連時代の記念碑にはロシアの優位性が明らかだ。ただし、この記念碑はすでに撤去されており、「ソヴィエト彫刻記念碑ミュージアム」¹⁸に、レーニンやカーネンの像とともに飾られている。



写真22 パンフィーロフ公園、
「アフガニスタン及びその他の国の領域の
軍事行動で亡くなったカザフ人を悼む碑」
(2014年6月9日筆者撮影)



写真23 パンフィーロフ公園、
バウルジャン・モムシュウル
(2014年6月9日筆者撮影)

17 ラインベク通り（旧タシケント通り）とプーシキン通りの交差点に1967年建立された。撤去年は確認できなかったが、その後カザフの民族的英雄パティル・ラインベクの騎馬像（彫刻家：E.ラフマディエフ、建築家：B.ネムチコフ）が建立された。

18 アルマトイの都心からは少し離れたアバイ通りのファミリーパークの奥に位置する。

総じて、「榮譽のメモリアル」のゾーンの外部では、脱ロシア化が顕著である。ソ連崩壊後にカザフ民族の英雄が多く建立された。中でも興味深いのは、レーニン像¹⁹を撤去した後のアスタナ広場（旧レーニン広場）に、二人のカザフ人女性の銅像【写真21】が1997年というかなり早い段階で建立されていることだ。独ソ戦で活躍したソ連邦英雄マンシユク・マメトヴァ（1922-1943）とアリヤ・モルダグロヴァ（1925-1944）（彫刻家：K.K.サティバルディン、建築家：T.エラリエフ、B.シドロフ）である。容貌にははっきりとアジア的な特徴がみてとれる。その後、2003年にパンフィーロフ公園敷地内にもアフガン戦争記念碑「アフガニスタン及びその他の国の領域の軍事行動で亡くなったカザフ人を悼む碑」（彫刻家：K.K.サティバルディン、建築家：T.エラリエフ、B.シドロフ）【写真22】が建立されているが、3体の人物はいずれもアジア的な容貌が特徴的である。2010年にはバウルジャン・モムシュウルの銅像（彫刻家：H. ダルバイ、P.サティバルディエフ）【写真23】が建立された。モムシュウル（1910-1982）はパンフィーロフ師団に属したカザフ人で、アレクサンドル・ベクの小説『ヴォロコラムスク街道』（1942年）で主人公として描かれた。また自身も文学的に高く評価される回想録を残した。

実のところ、同じ敷地内に1968年にパンフィーロフの半身の銅像【写真24】（彫刻家B. A.トゥレコフ、建築家T. K.バセノフ）が建立しているのだが、ロシア民族のパンフィーロフの上半身の銅像よりも、モムシュウルの全身像のほうが造形としても、ロケーションとしても勝っている。ソ連崩壊後には、街中にも、多数のカザフの伝統的民族英雄や文化英雄の碑が建立された。こうした記念碑は、具体的な人物像であるため、容貌にカザフの民族的特徴が伴うことは当然であるが、記念碑空間に目に見えるはっきりした変化をもたらした。すなわち、新生国家のアイデンティティを示す脱ロシア化とカザフ化である。

記念碑空間の脱ロシア化は、カザフスタン特有の現象ではなく、旧ソ連諸国に広く見られる。革命や社会主義の理念を記念した碑は、撤去されるか、郊外に移築された。代わりに新体制の象徴や民族文化を顕彰する碑、ソ連時代の粛清の犠牲者を悼む碑などが現れた。しかし戦争記念碑は撤去されない傾向にある。その理由としてしばしば挙げられるのが、記念碑のサイズの大きさである。あまりに壮大な記念碑は撤去の技術的難易度、経済的負担が難点となり、撤去が検証されても、実行は断念される。残存しても相対的に地位は低下した。それでも、戦勝を記念する垂直的構造物や、戦死者を悼む母像や永遠の火、あるいは、匿



写真24 パンフィーロフ公園、
パンフィーロフ像
(2014年6月9日筆者撮影)

19 1957年に建立されたレーニン像は高名なモニュメント製作者エヴゲニー・ヴチェイチによって作成された。

名性の高い兵士の像といったソ連的文化コードが比較的残るゾーンである。

ここで、ソ連的要素の残存として注目されるのは「ロシアは偉大なり、退却する場はない、背後はモスクワのみ」との銘文である。これはドゥボセコヴォ駅の戦闘でクロチコフが発した言葉とされ、パンフィーロフ師団の「功績」の神話と切っても切り離せない。戦時プロパガンダの陳腐なフレーズであるが、文言通りに受け取ると、強烈なロシア中心主義、モスクワ中心主義に困惑する。

記念碑周辺の一帯はソ連崩壊のわずか二年後1993年に国立公園に指定され、芸術的・建築的な文化遺産として保護された。そのため、ソ連を祖国とみなし、その防衛のために闘うロジックが消滅したのに、時代錯誤な銘文も像も残ったのである。国立公園でなければ、脱ロシア化の流れの中でこの記念碑空間も解体されたていた恐れがある。少なくとも、ロシア中心主義的要素は排除され、カザフスタンの愛国主義空間として再構築することが試みられた可能性が高い。なぜならば、独ソ戦の記憶は、ロシアからの自立を阻む呪いになりうるからだ。そして、実際、死者崇拝と英雄主義の共有がゆるやかに互いをつなぎ止める媒体になっている。実のところ、カザフスタンはロシア系住人を多数抱えており、エストニアにおける兵士像移設に伴う騒動やウクライナ侵攻に際するロシア系住人保護という名目を考慮すると、独ソ戦記念碑は慎重に扱うべき政治的争点である²⁰。

そもそも興味深いのは、特定の戦闘の記念化が、独ソ戦全体の代理表象となっていることだ。モスクワ攻防戦がローカルな局地戦ではなく、ナショナルな事件として位置づけられているのはカザフスタンのみだ。銃後の戦勝記念碑は、あくまで独ソ戦の戦勝の記念や戦死者の追悼が名目なので、オベリスクや母の像のように抽象的でどうとでも解釈できるタイプが多い。銃後と総力戦体制を顕彰するタイプもあるが、いずれも、特定の局地戦がテーマとはならず、このような問題は発生しない。

しかし、逆に言うと、ソ連時代には首都防衛への貢献が、ソ連という「想像の共同体」における優位性を主張し、正当化できる根拠として機能しえたはずである。当時はソ連邦構成主体として都合の良いナラティブだったのだ。そして、ソ連崩壊後、ロシアの勢力圏、ロシア語文化圏に踏みとどまる選択をした時点では、不都合はなかったであろう。

その点で気になるのが、兵士像の過剰な英雄性である。ネリドヴォ村の戦場の記念碑を思い返そう。突出して壮大なモニュメントではないが、6体の10m規模の彫像は、それなりに大規模な事業である。とはいえ、ママイの丘ほどの規模で公園化されていない。突出したサイズの中心的な彫像がない。たった一基でも垂直的構造物が建立されれば、威圧的な権威主義的な空間となったはずだ。しかし複数の兵士像が林立

20 2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻を契機に、バルト諸国、中東欧では独ソ戦記念碑撤去の動きが再び現れた。従来神聖視されてきた墓地も対象となり、対ロシア感情の悪化が見て取れる。中央アジアでもロシア離れが加速化しており、今後の独ソ戦記念碑の行方が注目される。とはいえ、独ソ戦記念碑の撤去とは、ロシアとの関係を断絶する宣言であると同時に、国内のロシア系住人の感情を害しかねない。単に外交問題となるのではない。暴動が起これば、ロシアの軍事介入を招きかねない極めてセンシティブな話題である。

することで、威圧感は分散している。訪問者のいない平日に訪れると、寂しく広い平原に佇む6体の兵士像は遠目にはまるで墓標のようで、寂寥感と哀れみを誘う。記念日に人々が集まっても平原を埋め尽くすほどではなかろう。しかしこの悲劇的英雄性こそが、国民的な想像力をはばたかせる。平原の立像は静的である。ある者は地平線に目を凝らし、別の者たちは自動小銃や対戦車手榴弾を構えて戦闘に備えるという嵐の前の静けさが表現されている。パンフィーロフ師団の神話はナショナルな物語として、ソ連国民なら誰でも知るマスター・ナラティブである。訪問者は、彼ら全員が壮絶な最期を遂げることをあらかじめ知っているのだから、悲劇性を内在させた英雄をそこに見る。共有されるのは、追憶や追悼ではなく、そして国民統合のシンボルでもなく、英雄の物語というマスター・ナラティブである。したがって、この記念碑は、戦争の記憶を、共同墓地のヴァナキュラーな領域からパブリックな領域へと移行させたといえる。

他方で、アルマアタの都心に位置するパンフィーロフ公園は、市民が愛する散策の空間だった。そして悲壮感あふれる兵士像は、決して無邪気に戦勝を祝う空間ではない。兵士像は物理的にも前のめりに突進する姿勢で可視化されている。死に向かう一瞬を切り取ったものである。英雄主義の前景化は、戦場跡地の公的記念碑で好まれる造形である。それが銃後で現れるとき、別の意味が見いだされる。中央アジアでは、死者を象った記念碑はほとんど見られないから、なおさらだ²¹。前線から何千キロも離れた銃後で、わざわざ遠い地に壮健な若者たちを送り出すことに抵抗がなかったはずはない。理不尽な死に対する怒りもあったはずだ。そうした対抗的ナラティブを回収しうるのが、死者崇拜の空間である。単なる戦勝を記念する行為や場よりも、死者を弔い、悼む行為と場こそがパフォーマンスにナショナルな共同体の空間を創出する²²。死者を「英雄」として造形することは、単なる想起や追悼ではなく、社会的な意味での死者の復活である。同時に指摘すべきは、兵士像の悲壮感と迫力は際立っているものの、水平志向の構造物——すなわち永遠の火、死者を悼むレリーフなど、死者崇拜の要素が盛り込まれていることだ。オベリスクのような権威主義的な垂直的構造物が存在しないことも興味深い。訪問者がたじろぐ威圧感は、あくまで英雄性が生み出す印象であって、決して中央政府の権威主義的なふるまいによるものではない。理不尽な死に対し、国家防衛の文脈の下、名誉と社会的意義を与えることで、地域共同体や遺族を慰めただけではない。「国民」が死者とともにその名誉を共有する空間である。いつでも命を差し出せる国民イメージを内面化させ、政府にとって都合のよい国民を再生産しようとする空間でもある。そしてこれは後継国家にとっても、都合の良い国民像なのかもしれない²³。

21 前田しほ「ソ連の戦争記念碑のジェンダーと地域性：母国の母と悼む母のイメージ」ロシア東欧研究、第50号、2021年、37-38頁。

22 戦死者追悼の宗教的意義については、粟津賢太『記憶と追悼の宗教社会学：戦没者採否の成立と変容』北海道大学出版会、2017年に示唆を受けた。

23 パンフィーロフ師団の国民的な記憶化については課題が残る。というのも、筆者の力が及ばず、現地の記念碑論争を十分に把握できていないからだ。

4 モスクワ市内

4.1 モスクワ市内の独ソ戦の記憶化

モスクワの独ソ戦の記念空間を時系列に沿って整理すると、大きく三つの時代に分類される。最も古いものは、戦時プロパガンダに関連するものである。赤の広場は、1941年の軍事パレードの記憶と結びつき、今日も再現されている。また、戦時中に建設された地下鉄駅の装飾も忘れてはならない。第一期の地下鉄工事は1931年に開始し、第三期は1940年に開始した。モスクワに戦火が迫った際には一時中断したが、1942年5月に再開し、終戦までに七つの駅が建設された。それらの駅構内には重工業や農業を支える銃後の市民の様子が刻まれ、総力戦が称えられた。戦時プロパガンダは、戦後構築される集合的記憶とは意図も機能も異なるが、戦争の記憶の風景が戦後の市民の日常生活に無意識に溶け込んでいる点は注意したい。今日も、地下鉄を利用する市民に向けて無意識に外敵への恐怖をあおり、国民統合を働きかけている。

第二は、クレムリンの城壁の外側に沿う墓所である。もっとも目立つのがレーニン廟であるが、赤の広場側の城壁は1917年の革命時に命を落とした人々の共同墓地として利用され、それ以来、政権にとって最高度に重要な人物が埋葬されてきた。我々の関心を引くのは、マネージ広場側の城壁の無名戦士の墓【写真25】(彫刻家：H.トムスキー、建築家：Д.ブルディ、B.クリモフ、Ю.ラバエフ)である。1967年5月8日にブレジネフの手で点火された。それ以来、ソ連国内でもっとも格式の高い戦死者追悼式典が執り行われる場として、各国要人が慰問に訪れる第一級の記憶空間としての地位を占めてきた。

第三のターニングポイントは戦勝50周年記念に沸いた1995年である。大統領はエリツィンだ。ポクロンナヤ・ゴラの戦勝記念公園【写真26】が曲がりなりにも完成を迎え、モスクワ攻防戦の記憶と深く結びつく記念碑やジューコフ将軍の像、さらにモスクワ攻防戦を記念する博物館が表れ、モスクワ市内でモスクワ攻防戦の記憶が可視化された。それでもなお、首都の戦争記憶空間の第一位を占めているのは、赤軍の顕彰であり、独ソ戦全体の勝利である。モスクワ攻防戦はあくまでその一部であり、これに特化してナショナル・シンボルと位置付けられる記念碑は見当たらない。モスクワ



写真25 モスクワ、無名戦士の墓
(2010年10月6日筆者撮影)

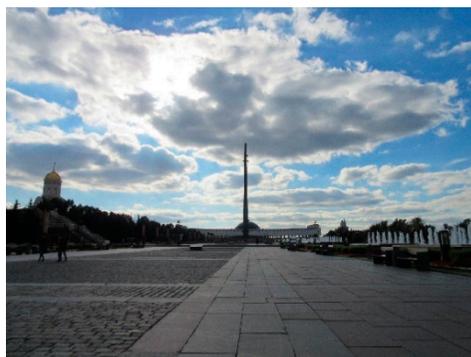


写真26 モスクワ、戦勝記念公園広場
(2015年9月28日筆者撮影)

攻防戦に関連する出来事も場も、できる限り独ソ戦の文脈で語られ、モスクワ攻防戦を忘却しようとする力学が働き続けている。

これら首都の集合的記憶は、今日のロシアにおいてもナショナルな欲望を掻き立てる媒体として生き続け、プーチン体制下ではさらに磨きがかけられている。赤の広場、クレムリンの壁の無名戦士の墓、ポクロンナヤ・ゴラの戦勝記念公園は、国民統合の空間と認められる独ソ戦のナショナル・シンボルである。しかしながら、これらの記念碑を注意深く読みとくと、マスター・ナラティブとサイレント・ナラティブが表裏一体であることが明らかになる。独ソ戦をナショナルな物語／歴史として位置づけたい首都モスクワとしての欲望と、ローカルな戦争体験としての「負け戦」を忘れがたい地域共同体としての苦悩が混在している。

4.2 無名戦士の墓

本節ではサイレント・ナラティブを読み解く試みとして、無名戦士の墓に注目しよう。1967年に建立された際、前述のように、クレムリンの城塞の壁には一体の無名の遺骸が収められた。レニングラード街道40km地点、1974年に「モスクワ防衛者記念碑」が建立された共同墓地から、運ばれた。

これをもって、モスクワ攻防戦が記念されているとの反論があるかもしれない。確かに、モスクワ攻防戦の死者であることは知られている。しかし、モスクワ攻防戦と結びつけて語られることはほとんどない。1967年はモスクワ防衛25周年の記念年だが、それについて言及されることもない。この不自然な沈黙こそナラティブとして注目すべきなのである。その意味では、匿名の骸が何者でもなく、だからこそ何者でもありうるメカニズムも、モスクワ攻防戦との関係性を限りなく希薄化させるファクターである。つまるところ、1965年の英雄都市授与は赦免ではなかったわけだ。首都としての体面の回復程度の位置づけだったのだろう。

クレムリンの壁に納められた遺骸はあくまで無名である。特定の地名や人名とは乖離した空虚な器として死者の身体が、国民的な象徴として求められる。骸が象徴するのは、モスクワ攻防戦ではなく、独ソ戦全体の戦死者である。特定の個人や戦場に紐づけされないことが重要なのだ。理不尽な暴力によって命を奪われた身体であり、それゆえに一種のスケープゴートの役割を果たす。一般的に、スケープゴートとしての効果は、子供や未婚の若い女性のように無辜で傷つきやすい存在に期待される。しかし、生身の人間は近現代の総力戦の破壊的暴力の前ではあまりに非力で、マジョリティ＝男性の身体も粉々に打ち砕かれてきた。前線に積極的に送り出され、抹殺されたのは圧倒的に成人男性だったのため、独ソ戦の物語において、男性＝将兵こそが平和の礎として捧げられた生贄とみなされる。

その意味で、記念碑のシンプルな造形は注目に値する。高価な石材を土台とした永遠の火の背景の台に、ブロンズ製の旗が広げられ、ヘルメットが載せられている。兵士の像はない。兵士の身体について語られないのだ。しかし、逆に、身体の不在が兵士の存在を強調する。兵士の付属物のみを視覚化することで、生を奪われた身体が想

起される。訪問者はそこに名の知れぬ兵士が葬られていると知っている。だから、兵士が視覚化されなくても、いやむしろ、不在が視覚化されるからこそ、「我々」という国民の概念が強化される。

永遠の火は、もともと西ヨーロッパの第一次大戦後の死者をしのぶ無名戦士の墓に由来する。正確に言うと、無名戦士の墓に灯される火である。通常、無名戦士の墓には名の知れぬ兵士の遺体が一体葬られているか、空である。匿名の遺体を選び、葬るプロセスは国民的聖地となるための象徴的な儀礼であり、ヴェネディクト・アンダーソンはこの匿名性こそが国民的想像力を喚起し、記念碑の公共性と儀礼的経緯を高めるものだとする²⁴。無名戦士の墓という概念は「西側」の近代国家発祥であり、世界中に広がり、国家元首が外国を公式訪問する際には表敬訪問する慣習がある。大抵は首都や歴史的な大会戦の跡地に限られる。ロシアにおいても、政府主催の戦死者祭祀の中心と位置付けられ、節目となる記念日における祭典の場として、外国元首の公式訪問のイベントとして、国家儀礼が行われている。

ロシアはこの記念碑を異様に好む。たいていの町の中心広場や戦勝記念公園に設置され、地元市民に愛される名所として広がった。無名戦士の墓であることよりも、炎を灯す形態の記念碑として認識されているようである。

ロシアで初めて永遠の火が建立されたのは、1957年に当時のレニングラード（現サンクト＝ペテルブルグ）の「マルスの原」にある二月革命の死者を葬った革命戦士の碑である。1960年のピスカリョフ墓地²⁵、1965年のノヴゴロド、そして1967年のモスクワの永遠の火もここから分けられた。

1967年に完成したのは、モスクワの無名戦士の墓だけではない。今日でも、ともにロシアを代表する別の記念碑も完成した。モスクワの無名戦士の墓が5月8日の戦勝記念日の前日、ヴォルゴグラードのママイの丘「母国の母は呼んでいる！」が10月15日に記念式典を迎えたのである。どちらも近代国家を象徴する記念碑であるが、その機能は住み分けられている。ママイの丘の「母国の母」は、その壮大さで国民を圧倒し、愛国主義を駆り立て、国民統合のシンボルとして君臨した。他方で、無名戦士の墓は大地に密着し、水平的に死者を悼み、生者同士が連帯する空間である。この水平性は、ソ連で最初の死者を追悼する場が、埋葬地であって、そこでは顔を知る死者と生者、あるいは生者同士のきょうだい愛的な連帯、水平的な関係性を生み出していたことと似ている。しかしながら、決定的に異なるのが、無名戦士の墓で葬られるのは匿名の死者であり、水平的な連帯を結ぶのは国民であることだ。そして共有されるのは追憶や追悼だけでない。名誉もまた共有される。つまり、墓地ではヴァナキュラーな水平的記憶空間だったところを、その水平性を維持しつつ国民統合の空間へと再編するのが永遠の火なのである。ママイの丘の「母国の母」とモスクワのクレムリンの無名戦士の墓は、両者が対となって、国民統合を推進する。

24 ヴェネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）『定本想像の共同体』書籍工房早山、2007年、32頁。

25 レニングラード攻防戦の民間人死者（主に飢餓による死亡者）を葬った巨大な共同墓地。

事実、多くのメモリアル・コンプレクスでは、オベリスクと永遠の火、勇敢な兵士像と悼む母といった具合に、喚起する感情を異にする記念碑をセットで建築する。先に、モスクワ市内には死者崇拝の記念碑とセットであるべき戦勝の記念碑が存在しないことを指摘したが、モスクワは首都ゆえ、対になるべき空間は市内ではなく、ソ連全体を見るべきなのである。機能の異なる記念碑空間が並存することで、愛国主義、郷土愛、死者崇拝といった様々な感情の境目があいまいになって、融合する。自尊心を満たし、ナショナルな欲望も掻き立てるので、独ソ戦の神話は麻薬のように国民の内面を侵食し、その陶醉感を手放せなくなるのだ。

とはいえ、実際クレムリンと赤の広場を訪れると、周辺の壮大な建築物やきらびやかな教会建築に目を奪われて、水平的な永遠の火は見落としかねない。厳粛であるが、実に地味なのである。

モスクワの心臓部であるクレムリンと赤の広場は、世界遺産に認定された「伝統」的な歴史地区である。そもそもクレムリンは、かつてはソ連、今日ではロシアの権力中枢の代理表象として世界に知られるが、もともと中世ロシアの城塞を意味する普通名詞である。ロシア平原では、川の合流点など防御しやすい地点に城塞が築かれ、そこを拠点に町が発展した。ヨーロッパ・ロシアの古い町では原始的な城塞の遺跡を見ることができる。モスクワのクレムリンもまた合流点に築かれた12世紀の城塞から始まり、2.25kmの城跡と20の城門に囲まれた広大な敷地には、古くは15世紀から様々な時代の聖堂や宮殿が残り、1990年には世界遺産に登録されている。

クレムリンの隣の赤の広場にも、1560年にイワン雷帝によってカザン・ハーン国に対する勝利を祝って建設された聖ワシーリー大聖堂がある。17世紀の建築物であるカザンの聖母聖堂やヴォスクレセンスキー門は、破壊されたが、ソ連崩壊後に再建された。19世紀の建築物としては、聖ワシーリー大聖堂前のポジャルスキーと商人ミーニンの銅像（1812年）が、1612年にモスクワをポーランド軍から解放したこと記念している。赤の広場に面する国立歴史博物館（1875年）、国立百貨店通称 Gum（1893年）もまた19世紀の建築物である。

民族的伝統が色濃いクレムリンと赤の広場で、ソヴィエト的な建築物として特筆すべきは、レーニン廟である。1924年のレーニンの死去に際して、全国から弔問に訪れる人民を迎えるため、木造の廟を建設したが、1930年に現在あるような石造の廟が完成した。上部に巨大な像を立てる案もあったが、シンプルな箱型に落ち着いた。死者崇拝という市民宗教の殿堂であるはずのレーニン廟もまた地味なのである。このようにモスクワの心臓部は、突出したモニュメントを中心とする垂直型の空間ではなく、伝統的なもの、近代的なものが選択的に取り入れながら、複合的なモニュメンタルな空間でありつづけている。

長々とクレムリンと赤の広場の記念碑性を述べたのは、数々の歴史的建造物の中で、無名戦士の墓は特別に際立った存在感を発揮しているわけではないことを指摘したいからである。首都の象徴性は伝統的建造物によって演出されており、独ソ戦の死者崇拝によって国民統合を図る場は控えめに設置された。むしろ、首都性を崩さない



写真27 モスクワ、戦勝記念公園、オベリスク（2015年9月30日筆者撮影）



写真28 モスクワ、戦勝記念公園、永遠の火（2012年3月22日筆者撮影）

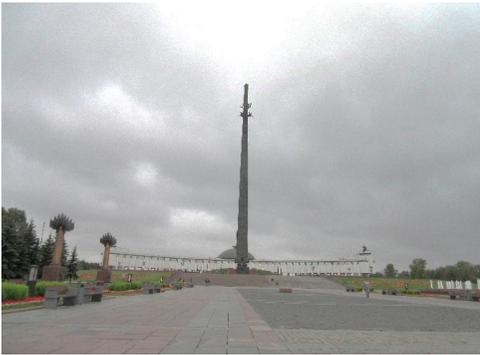


写真29 モスクワ、戦勝ミュージアム（2015年9月29日筆者撮影）



写真30 モスクワ、戦勝記念公園、民衆の悲劇（2015年9月28日筆者撮影）

ために、慎重に設置された印象すら覚える。

4.3 モスクワ攻防戦の記憶の想起

それ自体独立した記念碑空間がモスクワに創出されるのに、1995年を待たなくてはならない。ポクロンナヤ・ゴラへの戦勝記念公園の建設は、1947年に計画が持ち上がったが、スターリンによる凍結、イニシアティブをとっていた彫刻家エフゲニー・ヴチュエイチチ死去、モスクワ・オリンピック開催に伴う資金不足など何度も頓挫し、礎石がおかれたままだった。しかし、1985年にゴルバチョフの挺入れで始動し、1995年に完成した。ソ連最後の記念碑プロジェクトであるが、同時にソ連崩壊後に解禁された宗教性など新時代の要素を取り込んでいる。高さ141.8m²⁶の壮大なオベリスク（彫刻家：3.ツェレテリ、建築家：JL. ババキン）【写真27】、永遠の火【写真28】、巨大な記念館「戦勝ミュージアム」【写真29】のほかに、広大な敷地には様々な犠牲者への追悼碑、宗教施設（正教会、シナゴグ、イスラム寺院）、兵器展示場、そして古代から現代まで、大小さまざまな戦争関係の記念碑の建立が図られ、今日も更新

26 141.8は1941年6月22日から1945年5月9日までの独ソ戦が続いた1418日間を記念した数字である。

が続いている²⁷。壮大な垂直的構造物、巨大建造物、広大な広場は権威主義を発動する。他方で、ソ連時代には顕彰の対象から外されていた第一次世界大戦の戦死者の追悼碑、ウクライナが寄贈した行方不明者の記念碑、ホロコーストのユダヤ人犠牲者の記念碑「民衆の犠牲」【写真30】として現れている。これはソ連の記念碑空間にとっては大きな革新であった。ただしここにも犠牲者性という新しい要素の闖入をみてとることが可能だ。

モスクワ攻防戦の表象についてはジオラマが興味深い。公園内の戦勝ミュージアム一階には中央の「記憶と追悼のホール」の周囲に、常設のジオラマ・ホールが7つ設置されており、そのタイトルは「モスクワ郊外の反撃」、「スターリングラード郊外の闘い」、「レニングラード包囲」、「クルスクの闘い」、「ドニエプル渡河」、「ベルリン攻略」である。「モスクワ郊外の反撃」は前景に兵士たちが行進して前線に向かう一群に、後景に雪景色の平原を舞台にした戦闘が描かれている。これはペレミロヴォ高台から、モスクワ近郊でナチ・ドイツ軍に反撃するために出撃していくソ連軍の光景である。ジオラマ・ホールの壁は、ジオラマに向かって右側には赤の広場の軍事パレードと、当時のモスクワ市内の様子が描かれている。左側は、ネリドヴォ村の戦いで、パンフィーロフ師団が塹壕から抗戦する様子が描かれている。このように既知の神話化されたモチーフが見られるが、しかし、ほかのジオラマの演劇的な戦闘シーンと比べると、静的で控えめな印象は免れない。また、多くの闘いのうちの一つという位置づけは、埋没化という従来の不都合な記憶の取り扱いと同じである。それでも、視覚化されていることは重要である。

1995年にはもう一つ注目すべきミュージアムが開館した。国立モスクワ防衛博物館【写真31】である。従来のモスクワ中央軍事博物館【写真32】、それから郊外のクビンカ戦車博物館、地下壕跡を利用した冷戦博物館に比べてもはるかに知名度は落ちるが、ローカルな共同体としてモスクワ市及び周辺の民間人が体験した防衛戦が展示されている。郊外での塹壕掘への動員、空襲、防火訓練、戦時下の庶民の暮らしぶりが中心である。このミュージアムは地下鉄ミチュリンスキー大通り駅から徒歩1kmの



写真31 モスクワ、国立モスクワ防衛博物館
(2016年10月20日筆者撮影)



写真32 モスクワ、モスクワ中央軍事博物館
(2015年10月1日筆者撮影)

27 詳しくは下記参照。Nurit Schleifman, "Moscow's Victory Park", *History & Memory* 13:2 (2001), pp. 5-34.

かつてのオリンピック村に位置している。新路線開通前は、ヴェルナツキー大通駅に到着後、路線バスで20分程度かかり、気軽に訪問を思い立てる立地ではなかった。実際防衛線が通っていた地域でもあるが、それだけが理由ではない。オリンピック村として高層住宅群が建てられた際のオリンピック村事務所の建物を再利用している。博物館の起源は1979年に遡り、記念の節目の年にモスクワ攻防戦の展示が行われていたが、常設博物館として開館したのは1995年である。中央軍事博物館や戦勝ミュージアムと比較すると、明らかに建築物としての外観は見劣りがする。モスクワ市民の間でも知名度は低い。展示も方向性が異なり、戦勝神話を高らかに謳いあげるのではなく、生活に密着した市民の戦争体験を丁寧に掘り下げている。ただし、気になるのは、英雄性が後退した代わりに、ここでも犠牲者性が強調されていることである。林志弦は犠牲者意識に依拠したナショナリズムが敗戦国を中心に戦後イデオロギーを構築したことを指摘しているが²⁸、ロシアでもノスタルジックな犠牲者意識が勢力を拡大している。この傾向は1995年以降に見られるようになる。ペレストロイカからソ連崩壊後しばらくは、社会が混乱し、また独ソ戦神話への検証が行われたこともあり、戦争記念碑は新たに建立されることはなかった。しかし、1995年の50周年事業をきっかけに、再び戦争記憶は関心を集め、新しい局面を迎えるのである。エリツイン時代の記念碑政策はたしかにリベラルであり、過去と向き合う試みも評価されるべきだろう。とはいえそれは途中で挫折し、プーチン政権下では英雄主義と犠牲者性が結びつき、より強力な神話として勢力を拡大している。そういう意味でも、エリツイン時代の戦争記憶も連続性の観点から検討すべき対象となる。

1995年に建立されたモスクワ攻防戦と深く結びつく記念碑のうち、注目されるのは、都心、それもマネージ広場から赤の広場への入り口付近に建立されたジュコフ像【写真33】（彫刻家：B.クルィロフ、建築家：Ю.グリゴリエフ）である。ジュコフはスターリンによって追放され、ブレジネフ期に復権するも、すぐに失脚し、政治

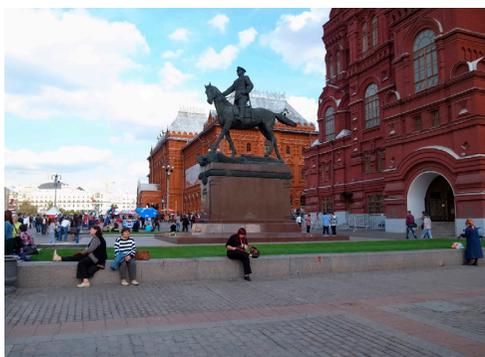


写真33 モスクワ、ジュコフ騎馬像
(2012年9月21日筆者撮影)



写真34 モスクワ、ジュコフ像
(2015年9月23日筆者撮影)

28 林志弦（沢田克己訳）『犠牲者意識ナショナリズム：国境を超える「記憶」の戦争』東洋経済新報社、2022年。

の表舞台から姿を消す。しかし、傑出した英雄として庶民の支持を集めており、1995年によろやく記念碑空間に出現する。都心から離れた住宅街にも全身像【写真34】（1995年、彫刻家：J.I.ケルベル、建築家Г.Г.レーベデフ）が建立され、こちらにははっきりと「モスクワっ子から感謝をこめて」という一文が土台正面に刻まれている。高名な彫刻家が手掛け、造形としては明らかにこちらが勝る。

1995年には空襲経験を語る記念碑も現れた。例えば、地下鉄クリラツコエ駅の近くのオーセン遊歩道には、ドイツの爆撃機に対抗した高射砲兵たちを顕彰するモスクワ防空防衛記念碑【写真35】（彫刻家：J.I.ケルベル、建築家：E. Г.ロザノフ）が建立された。これもケルベルの作品である。聖母像を連想させる赤子を抱く母親の像であり、背後のハイレリーフに高射砲兵たちが刻まれている。当時この近辺はモスクワ市に編入されておらず、行政区画としてはクリラツコエ村の森だった。1941年のモスクワ攻防戦の際に、ナチ・ドイツの攻撃機の撃墜に最初に成功し、まさにその撃墜地点に記念碑が建立された。

これら1995年に建立された記念碑を除外すると、モスクワ市内でモスクワ攻防戦を記念すると明確にうちだした公共記念碑を探すのは困難だ。公共記念碑だけでなく、1960年代後半から70年代にかけて、地区行政や学校、大学、工場、病院などの小さな共同体単位によって無数に建立されたささやかな記念碑²⁹においても、モスクワ攻防戦を明記したものはない。碑銘に刻まれるのは、決まって1941年－1945年の戦死者を悼む、あるいは榮譽を称えるといった文言である。モスクワ攻防戦は独ソ戦の一部に過ぎないと強調される。しかし、モスクワから前線に送られた兵士は、生き延びて、さらに先の戦場で亡くなったとしても、ほぼ確実にモスクワ防衛に駆り出されている。この種の非公的記念碑は旧ソ連のほかの都市にもたくさんあるのだが、モスクワの場合は、何千キロも離れた見知らぬ異国で戦死したというよりも、数十キロ先の郊外で戦っている。これらの記念碑には、今日も花が捧げられた痕跡がしばしば残っており、地域共同体が悼みを共有する場である。人々にとっては、モスクワ攻防戦の重みが大きいことは間違いない。ゆえに、モスクワ攻防戦に沈黙するのは不自然であり、これもサイレント・ナラティブの一つの形態とみなされる。

このようにモスクワ攻防戦のナラティブは抑制されているが、かろうじて地域共同体としてのモスクワを記念する碑としてあげられるのが、英雄都市を顕彰する碑である。最初に英雄都市と呼ばれたのは、1945年、レニングラード、スターリングラード、オデッサ、セヴァストポリである。前述のように1965年に英雄都市が称号として授与される際に、よろやくモスクワもその一員に含まれた。

「英雄都市モスクワ」（彫刻家：A.シチェルバコフ、建築家：Г.ザハロフ、3.チェルヌイシェヴァ）【写真35】は40.5mの大理石のオベリスクで、クトゥーゾフ通りとポリショイ・ドロゴミロフスカヤ通りの三叉路に立つ。立地、サイズの壮大さ、モスクワ解放35周年の1977年戦勝記念碑5月9日に落成したことが儀礼的な国家事業であった

29 モスクワ市内の小さな記念碑の造形については、前田しほ「ロシアの戦争記念碑における兵士と母親イメージ：国民統合のジェンダー・バランス」地域研究 第14号第2巻、2014年、17-42頁で論じた。

ことを物語る。英雄都市としての顕彰では、モスクワ攻防戦に言及せざるをえなかったであろう。しかし、ここでも不都合な記憶を、多くのうちのひとつとして希釈する忘却法が用いられている。なぜならば、この記念碑を起点とするクトゥーフ通り沿いには、いくつかの重要な戦争ミュージアムと無数の記念碑が並ぶ。ナポレオン戦争を記念するボロジノの戦いのパノラマ館、ポクロンナヤ・ゴラの戦勝記念公園（当時は予定地）などの国民的戦争のメモリアル・ゾーンを形成する一部だからである。また、人が集まらないように記念碑周辺の空間が制限されている。オベリスクの高さは十分に壮大であるが、それに対して敷地は不釣り合いに狭い。これは式典やパレードのための広場ではない、つまりその周辺に人が集まることを想定していない、人が集まらないように故意に集まりにくい立地を選んだのである。この記念碑は、クトゥーフ通りを行き交う車や歩行者が眺めるだけのランドマークに過ぎないのだ。

造形上も、敗北を呼び起こす戦闘は希釈された。オベリスクの周囲を取り囲む、およそ5mの三体の像に注目しよう。自動小銃とヘルメットの姿のおなじみの男性兵士像、鉄鋼業に従事する高齢男性、そして砲弾を抱える女性の三体が、いずれも外側を向いている。戦争記念碑でよく見られるのは勇敢な兵士のイメージであるが、ここでは銃後を支えた女性や老人と階層化されることなく、対等な三位一体が形成されている。ジェンダーと年齢を超えて、国民が一致団結して、勝利を得たという国民統合をめざす意図がうかがえる。このように一見顕彰しているように見えて、様々な条件付けによって、ナラティブを不可視化するのである。

それでは最後に、モスクワにおいては例外的にモスクワ攻防戦を記念してきた碑を取り上げよう。第一レニングラード陸橋に1943年に建立された男女の兵士像「勝利のトリウムフ」（彫刻家 H. B. トムスキー、建築家 Д. H. チェチュリン）【写真36】が確認される。当時の素材は石膏だったが、1960年代にレニングラード街道の新しい陸橋に青銅で立て替えられた（彫刻家 K. H. ヤコブレフ）。

これは戦時プロパガンダである。男女が「対等」な関係性で描かれる図像は、1930年代のプロパガンダ・ポスターや銅像の特徴である。また兵士の身振り・表情が示す明るい未来への希望は、戦局好転後の戦時プロパガンダ・ポスターの特徴であり、悲



写真34 モスクワ、モスクワ対空防衛記念碑
(2012年3月26日筆者撮影)



写真35 モスクワ、英雄都市モスクワ
(2012年3月24日筆者撮影)



写真36 モスクワ、勝利のトリウムフ、
男性兵士像、(2012年9月24日筆者撮影)



写真36モスクワ、勝利のトリウムフ、
女性兵士像 (2012年9月24日筆者撮影)

壮感にあふれるブレジネフ期の兵士像とはメッセージ性が異なる。したがって、この記念碑は、造形的にも戦時プロパガンダの特徴と合致する。

とはいえ、戦時中のプロパガンダは持ち運びの便が良く、量産できるポスターが主要メディアであり、記念碑は殆ど建てられていない。記念碑は戦後ある程度時間がたってから、記念の年を祝って建立されるのが基本である。しかしながら、フルンゼのパンフィーロフ像のように、少数の例外が存在する。この記念碑は石膏で作られたまさにその少数の例外である。1941年のモスクワ防衛の勝利を顕彰し、かつモニュメンタルな戦争記念碑として最初のものだという³⁰。

石膏から銅像への建て替えが行われた1960年代は、石膏像の劣化がかなりすすんでいたはずである。他方でモスクワに英雄都市の称号が与えられ、無名戦士の墓が設置され、そして郊外の戦場跡に記念碑が建立されはじめる時期である。劣化した石膏像がそのまま撤去されるのではなく、銅像に格上げされて再建された点に、モスクワ攻防戦が肯定的に再評価され始めた時代性を見出すことができる。

結論

本稿は、モスクワ攻防戦の（非）記念化の実態を調査し、パンフィーロフ師団の記念碑を中心に、戦死者を追悼するソ連の記念碑空間の社会的機能、表象、ロケーション、時代性を考察した。モスクワ市内ではモスクワ攻防戦の記念化が抑圧されていたことが確認された。これは中央政府のモスクワ攻防戦を忘却しようとする姿勢の表れである。1995年の戦争50周年記念においてモスクワ攻防戦が浮上したのは、ソ連崩壊による記憶の政治の変化だけでなく、社会の変化もあるだろう。世代交代による屈辱の感情の忘却、当事者性の希薄化によって、地域共同体としての都市モスクワの戦争体験が語りやすくなったこと、英雄主義が後退して犠牲者性に依拠する愛国主義の気配がでてきたことなどが考えられる。

他方で、戦場跡や戦死者の出身地ではモスクワ攻防戦はソ連時代にも記念化されて

30 Чистяков. А.В. Памятники Боевой славы Москвы. С.76

いることが確認された。敗北の記憶が視覚化されるターニングポイントは、1965年の戦勝20周年におけるブレスト要塞の名誉回復である。さらに、モスクワ攻防戦の具体的な顕彰の事例として、ネリオヴォ村のパンフィーロフ師団の神話に注目すると、戦時中、パンフィーロフ師団が結成された地域、すなわち死者の出身地であるフルンゼやアルマアタでは、公園の名称変更や記念碑建立によって、銃後の総力戦体制の構築に利用されていた。

戦後の最初の記念碑建立の動きは、戦死者の墓地や埋葬地であった。素朴な兵士像が建立され、訪問者とともに死者を悼む生き残った兵士の姿を象っていた。これは死者と生者の間を水平的連帯で結ぶヴァナキュラーな空間であった。

独ソ戦戦勝20周年の1965年やモスクワ攻防戦戦勝25周年の1966-1967年にかけて、レニングラード街道沿いに記念碑建立が進んでおり、多くの戦場跡や防衛戦跡にミュージアムや記念碑が建設されていたことが確認された。戦場跡の記念碑は、命を懸けて突撃する兵士像が主流となり、英雄主義が前景化した。

このころから、中央政府が戦争記憶を国民の物語／歴史としてマスター・ナラティブを作り上げるようになる。国家的レベルで戦死者を追悼し、戦勝を祝い、国民統合に利用するようになる。その代表例として、モスクワのクレムリンの城塞の壁の無名戦士の墓をとりあげ、これが水平的連帯の空間でありながら、ナショナルな統合を演出する空間であることを論証した。ここに収められた無名戦士はモスクワ攻防戦の死者であるが、モスクワ攻防戦の記憶は薄められ、あくまで独ソ戦の記念碑であることが強調されていた。

戦勝30周年の1975年には国家的大事業として、パンフィーロフ師団の死闘の跡地と出身地に壮大な記念碑が建立される。ネリドヴォ村の戦場の記念碑、6体の10mの兵士像はいわば墓標であり、戦死者を追悼する水平的連帯の空間でありながら、英雄主義を伴う。これによって、ヴァナキュラーな墓地の追悼空間が国民の物語へと接続する。これに対し、アルマアタの勇敢な兵士像を伴う永遠の火は、英雄主義と死者崇拝が接合して別の機能を見せる。銃後深い中央アジアでは、若者を徴兵されることへの不満、理不尽な死に対する怒りがあったはずだ。そうした対抗的ナラティブを回収し、同じく国民統合を図るために、英雄的な死者のイメージが利用されたのである。同じ戦争を顕彰しても、記念碑のたつ土地やデザインによって、社会的機能は異なる。

戦争神話のマスター・ナラティブは目に見える形で言語化され、視覚化されるので、議論しやすい。しかし、想起は忘却を伴う。そこで、本稿はこれまで議論の対象としてこなかった記念碑化されなかった事象をサイレント・ナラティブと規定することで、論考の枠組みを設定した。そこで見えてきたのは、戦場跡や前線における記憶の表出と比較して、モスクワ市内のモスクワ攻防戦は不自然な沈黙の下にあることだ。かつては封殺されてきたし、1995年以降も周縁的存在である。もしかしたら、大国ロシアの堂々たる首都にとっては、悲惨な現実の世界はあまりに耐えがたく、集合的記憶として過度に戦争体験を神話化するという象徴秩序を打ち立てることによってのみ、生き延びることができたのかもしれない。

本稿は、モスクワ攻防戦の記憶の表出を整理することで、ソ連時代の忘却と想起の実態をいくばくか明らかにすることはできた。その過程で、新しい課題として、エリツイン以降の現象として、従来抑圧されてきた戦争記憶が犠牲者性を伴うこと、そしてそれがプーチン時代にはナショナルな欲望と結びつくという展望を示した。しかし、真にトラウマ的な記憶とは、抑圧しても抑圧しきれないものだ。例えば、輝かしい戦勝の証としてドイツから持ち帰られた戦利品の数々は、ソ連の社会全体から家庭まで潤いをもたらした。今日でも「祖父がドイツから持ちかえった戦利品」は博物館や家庭で誇らしく保存されている。他方で、それらの本来の持ち主については沈黙されている。略奪という暴力的行為と加害者性が明白に示されているのに、誰もそれに向かい合わず、見えないふりをしている。こうしたサイレント・ナラティブの在り方が、2022年のウクライナで、ロシア兵に略奪行為を正当化する根拠を与えたのは疑いもない。

独ソ戦からの帰還兵の多くは、除隊時に誓約をしたこともあり、戦後沈黙を守った。しかし語られなかったトラウマは、彼らが亡くなった後も、ロシア社会の深層に沈殿していた。そうした記憶のロシアは過去の検証が行われなかったために、つまり過去に向き合って昇華しなかったがために、いったん象徴秩序が取り払われたら、再び現実とは忌まわしい嵐となって吹き荒れるようだ。私たちが考えている以上に、ロシアが独ソ戦で受けた傷痕は深く、それを戦後忘却して戦勝神話によって覆い隠してきた代償は大きい。とはいえ、忘却にも、スターリン／中央政府によって強いられた忘却から、民衆自らが進んで行く忘却まで、段階がある。筆者の力の限界でもあるが、記念碑はこのデリケートな差異を明らかにするには適さないメディアであるように思われる。そのような意味でも、文化研究的なアプローチの限界を感じるころである。今日ソ連時代の記念碑は消滅の危機に瀕しているため、実態調査を優先し、文書資料にあたることを後回しにしてきた。有名なモニュメントについては先行研究があるが、小さな記念碑については不明である。記念碑コンペや記念碑建立をめぐる議論、コンセプト、記念碑設立の経緯・日付など確認すべき事項が山積している。これらを課題として、現地での資料調査を計画していたが、Covid-19とウクライナ戦争の混乱によって渡航を断念せざるをえなくなった。新たな戦争は、独ソ戦の記憶にも新たな局面をもたらし、さらなる観察と検証が求められることとなった。これ以上検証し、信頼に足る結論を導き出すには、より綿密な調査と時間、別のアプローチが必要である。ここではひとまず課題を指摘するにとどめ、筆をおくこととする。

謝辞

本稿は、ソビエト史研究会2019年度年次大会（専修大学サテライトキャンパス、2019年7月6日）での口頭発表「旧ソ連における戦死者記念碑について：モスクワ攻防戦を中心に」、そしてこれを大幅に手直して行った第9回「文化としての社会主義」研究会（オンライン研究会、2023年1月28日）での口頭発表「モスクワと独ソ戦の記憶」の発表内容を論考としてまとめたものである。また文部科学省新学術領域研究「ユー

ロシア地域大国の比較研究」、科研費補助金（24720145、15KT0125、17H02240）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター平成26年、29年、30年及び令和3年度共同利用・共同研究「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」 「共同利用型」の支援を受けている。

